



撮影場所：彌彦神社（新潟県西蒲原郡弥彦村）

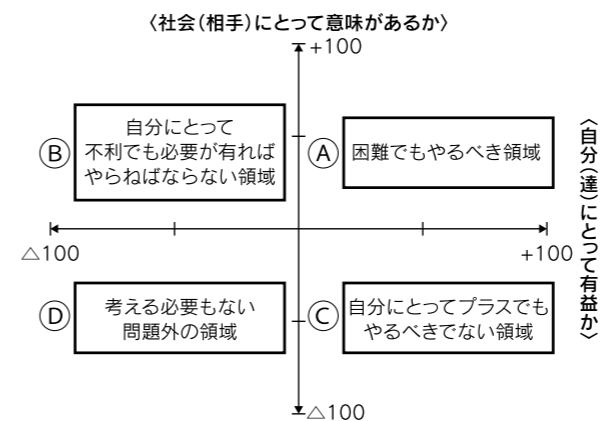
— 意志決定の座標軸 —

「中庸」という古典が有ります。
四書五経の四書（論語、孟子、大学、中庸）の一つです。
中庸という言葉の意味は「庸」とはツネという字で不変性を表します。
不変の原理原則が「庸」という意味です。
「中」とは異質なものを融合（複数のものが溶けあって一体となる事）
化成（良い方に改めて新しいものを作り出す事）してゆく事です。
もの是非善悪を正し、一見矛盾するが如きものを解消して「中」
へもってゆく事を「折中」と言い、単に妥協や歩み寄りのなものを
「居中」と言います。

人は不完全な生き物であるが由に、生きて生活して仕事をしてゆく上で、考え方の違いや、利害の対立は避けて通れないものではありますが、人間社会の評価（人間が決めた法律も含め）は、必ずしも絶対的に正しいものではありません。
法を熟知した悪人が、法に疎い善人に対し、現世の裁判では勝ってしまう現実が世の中には数多く有ります。
不完全な人間が不完全な人間を裁く事にも、無理が有るのかもしれない。

私は物事の判断に際して「意志決定の座標軸」というものを作っています。
生きてゆく事は大小含めて毎日が意志決定の連続ですが、小さな事はともかく大きな意志決定に際しては、自分の中にしっかりした判断基準を持つ事は非常に重要な事かと思えます。

私の考える判断基準は、①社会（相手）にとって意味の有る事かどうかという縦軸と、②自分（達）にとって有益な事かどうかの横軸があります。



この座標軸に照合して①の領域の事は、困難であっても、やるべき、あるいはやらねばならない事だと考えます。
また②の領域の事は、自分にとってはメリットが無いしリスクも有りますが、社会（相手）にとって必要が有る事であればやらねばならない事も有ると考えています。

問題は③の領域に有ります。
自分にとって利益であれば相手にとってやるべきでない事でもやってしまう考え方です。
世の中のトラブル、裁判沙汰のほとんどが、この領域で自分勝手な判断をした人達が、相手をトラブルに巻き込んでしまうものだと思います。
④の領域は誰の為にもならない領域で、通常考える必要もない領域ではありますが、③の領域の人達によって善良な人達までもこの領域に引きずり込まれる事もあり、やっかいな領域でもあります。

IT 技術の進化と共に、現実とバーチャルの区別がつかない人達も増え、人間力の劣化と共に理解に苦しむ様な犯罪者や国家が増えている様に思えます。
盗人にも三分の理と言いますが、盗人の理は盗人の理屈ではありません。
しかし、狡猾な悪に対し、善良な正義が必ずしも勝つものではないという現実も知っておく必要もあります。
それ由に我々は、正しい人生観、経営観を持つと同時に、悪質な人間、会社、国家と対峙してゆく慎重さと知識が、現実社会では必要とされる様に思えます。

嘘も百回千回ついていると、言っている本人も嘘を本当だと錯覚してゆくかもしれませんが「真実」は一つしか有りません。
しかし、その「真実」と異なる「現実」はいくつも有り、またいくらでも作れます。
我々は、真偽含めたいくつもの「現実」に惑わされる事無く、一つの「真実」を見極める力を、日頃から養ってゆく必要が有ります。

そうした意味においても「意志決定の座標軸」を自身の中にしっかりと構築するのは、とても大切な事ではないでしょうか。

我々は、人は必ず死ぬという「不変の真実」を基に自分の人生観、仕事観を持てば、社会（相手）にどうすれば喜んでもらえるかという価値判断を持って行動出来ると思えます。

「永遠の0」を読まれたまた映画を見られた方も多いかと思います。
有為な若い人達が、祖国日本の為に散っていった時代は、わずか70年程前の「真実」であります。
自分の我利我欲の為なら、相手に多大な迷惑を掛けても平気な人達や組織が増えてきている現代社会に、強い愛を抱かざるを得ません。

祖国日本の為に散っていった多くの英霊の為にも、善意の人達が安心して暮らせる社会を創ってゆかねばと強く思う最近です。

徳真会グループ
理事長 松村 博史